

《京都迎賓館ガイドツアー》開催のご報告

11月26日(日)紅葉シーズンの京都は気持ち良い秋晴れとなりました。今出川キャンパスでは学生達による148th同志社EVE祭が開催されている中、京都支部では第二弾となる京都迎賓館ガイドツアーを開催させて頂きました。3部に分かれて101名の方々にご参加頂きました事に感謝とお礼を申し上げます。

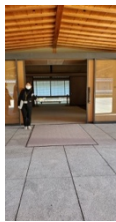
京都迎賓館は、H17年に海外からの賓客を真心込めてお迎えし、日本への理解と友好を深めて頂く事を目的に開館した国の施設です。まず最初にガイドの方より入館時の注意事項を聞き、空港の様なセキュリティチェックを受けてガイドツアーマイクを個々装着します。ガイドさんの詳しい説明によるツアー参観がスタートとなりました。

数奇屋造りの外観、美しい池泉回遊式庭園、日本の伝統技術が活かされた室内装飾、匠の技が活かされた調度品が展示され、日本の美を意識した多彩な見所ある空間はとても素晴らしく、最も賓客をお迎えするのに相応しい所だと感銘を受けました。

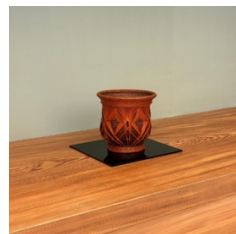
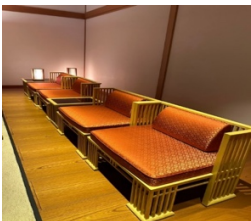
正面玄関



正面玄関は、落ち着いた色のニッケル屋根で御所の緑豊かな環境と調和する色調が印象的でした。そして、天井は吉野杉の中杓、樹齢700年の樺で造られた一枚板の立派な扉が私達の訪問を出迎えてくれます。引手は京都の組紐をモチーフに絆の意を込めたシンプルなデザインとなっています。玄関に入ると賓客へのおもてなしに屏風と生花が歓迎の心を表します。賓客の好みや国の特徴を考え飾られるそうで、おもてなしの心はここから既に始まっているのですね。

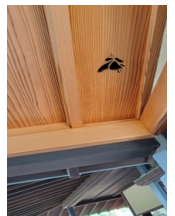
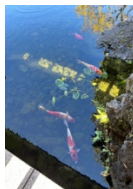


聚楽の間



ロビーとして位置付けられる空間です。聚楽の「聚」は寄り集まるといった意味があり、心が安らかで楽しいことが集まる場所という意味の思いが込められています。賓客にくつろいでいただく安楽椅は、鉄や釘を一切使わない伝統的技法である京指物を用いたものです。鮮やかな赤色の「西陣織」の布地を用いて、華やかさを演出しています。竹工芸の花籃は、人間国宝の故 五世 早川尚古齋の作品です。文箱は、同じく人間国宝の江里佐代子の作品です。

庭園



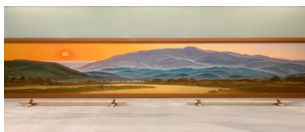
古くからの日本人の住まいに貫かれた伝統(庭奥一如)の思想庭園。深山幽谷から流れ出る水が注ぎこむ広大な池には錦鯉が放たれ、海外からの賓客に日本の文化「舟遊び」を楽しんで頂く和舟があります。ブータン王国の国王王妃両陛下が体験されました。余談ですが、非公式にブータンを日本人として初めて訪れたのは京都にある西本願寺の僧侶であったと伝えられています。東西の建物をつなぐ廊橋の船底天井には、四隅にトンボや蝶、昆虫の透かし彫りが施されています。京職人の遊び心が伝わり、紅葉が水面に映る景観は穏やかな時間と共に心から楽しませてくれ、庭園はずっと眺めていたいものでした。

夕映の間

日本画家の箱崎睦昌の下絵を「綴織り」と言う技法で織った織物が東西壁面にあります。大臣会合や会議、お茶のおもてなし、晩餐会の待合室として使用され、部屋を3分割出来るように壁面は可動式になっています。また天井からの照明は使用される目的に合わせて明暗の演出が準備されています。カクテルパーティーを行う際には、星空や蛍のような照明に替えることも出来るそうです。飾り台の蒔絵・螺鈿は山紫水明をテーマに、人間国宝の北村昭齋と息子の北村繁によるものです。



比叡月映



愛宕夕照

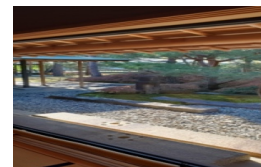
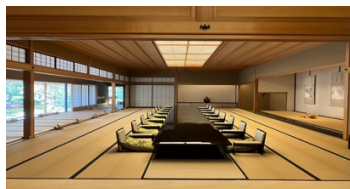
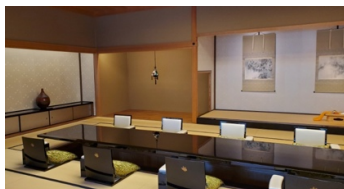


藤の間



京都迎賓館では1番大きな部屋で、宮中晩餐方式でおよそ60名、円卓を並べておよそ120名の会食が可能です。壁面装飾は、縦3.1m、横16.6mの大きさがあり、日本画家の鹿見喜陌の下絵をもとに、綴織りの技法で39種類の草花が織り込まれており、作品名は、「麗花」と言います。床に敷かれた緞通は、壁面装飾に描かれた「藤の花」が舞い散った様子を表現しているようで一体感を感じました。藤の間の舞台では、舞や能、琴の演奏、雅楽などが披露され、日本の伝統文化を楽しんで頂けるようになってきました。素敵な晩餐会が眼下に浮かび上がります。天井の照明は、本美濃紙と京指物の伝統的技能が使われた格子光天井になっています。「和風」の連風のような3段の笠は高さが調節でき、演出に合わせて実にそのパターンは15種類にも及ぶそうで驚きました。

桐の間



桐の間は、和食を提供する「和の晩餐室」です。最大24名までの会食が可能で中央の漆塗りテーブルの長さは12mもある一枚板だそうです。そこで京料理のおもてなしをし、「次の間」で芸妓や舞妓による舞や箏の演奏で彩りを添えます。釘隠しや襖の唐紙など各所には「五七の桐」が見られます。「五七の桐」は、昔は皇室の裏紋として使用されていましたが現在は日本国政府の紋章として使用されています。「五七の桐」が描かれた座椅子の桐の葉の色は微妙に異なり、同じ模様の椅子は一つもないそうです。説明を受けるまで気づきませんでした。



京都迎賓館は、歴史と文化を象徴する京都御所の中に佇まい、四季折々の風情と日本の温かい心を感じ取れる魅力的な場所でした。今回の秋行事第二弾も、参加者の皆様と貴重な体験と一緒に楽しく過ごす事が出来たと嬉しく思いました。学生達によるEVE祭のテーマである《今を紡ぐ、人を結ぶ》を私達父母会も共有し、これからも学生達の意気込みに負けないよう活動し賛同して参りたいと思います。また保護者の皆様には日頃より京都支部の活動にご理解とご支援を頂きまして誠に有難うございます。今回参加出来なかった皆様も是非次回お会い出来ることを楽しみにしております。